

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 李 承俊

論 文 題 目

日本人の疎開体験をめぐる文化史的研究

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 飯田 祐子
委員 名古屋大学教授 池内 敏
委員 名古屋大学准教授 日比 嘉高
委員 国際日本文化研究センター教授 坪井 秀人

論文審査の結果の要旨

〔本論文の概要〕

本研究は、アジア・太平洋戦争期に行われた疎開をめぐる文化史を構築することを目的とするものである。歴史研究と文学研究を横断することを方法として意識し、新聞雑誌の情報や調査報告書から小説まで考察の対象を広げ、疎開を語る言説について多角的に検証を行った。

第1部では、疎開に関する歴史研究の成果を継承する形で、戦争体験として語られた疎開体験について考察した。第1章では、疎開当時の言説を分析し、学童集団疎開体験が戦争体験として捉え得るという点に関して歴史的・思想的な背景を明らかにした。第2章では、1970年前後に編纂された空襲誌や疎開体験記録を分析し、疎開体験と空襲体験がともに語られることや、日常と非日常の接合、また都会と田舎の関係に対する正反対の評価の存在を明らかにし、戦争体験としての疎開体験の語られ方について考察した。第3章では、疎開体験を思想化し「世代」を構成しようとした「疎開派」の試みを取り上げ、その意義と限界について検証した。

第2部では、文学研究に近い立場で、疎開体験を書いた「内向の世代」について考察した。第4章で「内向の世代」を代表する黒井千次における「自己の空位」の質を検証し、戦後思想の特徴として指摘されてきた「悔恨共同体」を無化するものとして位置づけた。続く第5章では黒井の『時の鎖』を取り上げ、「内向」と疎開体験との結びつきを論じて、出来事の地点よりも語りの現在が問題化されていることを指摘した。第6章では、高井有一「北の河」を取り上げ、縁故疎開の体験を書いた小説を分析し、黒井千次の「内向」と同様の個の不確かさが語られていることを指摘した。第7章では、高井有一『少年たちの戦場』における学童集団疎開の語られ方を分析し、加害者と被害者という立場の複雑な交差について現代に接続させつつ考察した。

第3部では、歴史研究において提起された〈田舎と都会〉の関係性という問題について、文学研究の立場から考察を試みた。第8章では石川達三の『暗い嘆きの谷』について、第9章では太宰治の「十五年間」「やんぬる哉」における疎開表象に注目し、疎開体験の「語りにくさ」の問題が、〈田舎と都会〉の関係性につながる様相を明らかにした。第10章は、〈田舎と都会〉の接触の肯定的な語られ方を確認した上で、「内向の世代」の一人である坂上弘の「朝の村」に注目し、分からなさとしての恐怖が示されていることを指摘した。全体を通して疎開体験の多様性を抽出するとともに、当時の問題に加え、それが戦後において浮上する過程を文化史的に記述した。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

本論文は、「疎開」についてなされてきた歴史研究と文学研究の架橋を目論んだものであるが、研究史の緻密かつ的確な整理を経た上で、歴史研究が提示した課題について文学研究の立場を組み入れ検証するという方法によって、双方の研究領域にとって新しい成果を提示し得ており、企図の達成が認められる。「疎開」を語る体験記や「疎開」研究が、児童の集団疎開に関心を集中させてきたことを指摘するとともに、より多角的な検証を試み、「疎開」の多様な実態を浮かび上がらせた点も、高く評価された。子供だけではない大人にとっての疎開という観点や、疎開する側だけでなく疎開を受け入れた側の問題という観点などは、それぞれに疎開体験の多様性を浮かび上がらせた。また、疎開が戦争体験の一部であることを論証した上で、疎開を、空襲のような非日常の戦争体験と接続しながらも同時に日常性を帯びた体験として位置づけた点も、戦時下の「日常」に関する研究としての独自性が認められる。戦争体験としてだけではなく、田舎と都会の出会いという異なる文脈を抽出し、さらにその出会いの評価が肯定的なものとするか否定的なものに分離していることなどが指摘された点も、新たな知見となり得ている。

一方、文学研究としては、第一に「疎開文学」という新しいフレームを作り得たことが、大きな功績として認められた。また第二には、本格的な研究の少ない「内向の世代」について、疎開体験という新たな視角からその特徴を明らかにしたことも、評価し得る。「内向の世代」の作家が共通して語った「不確かな私」の問題と疎開体験の結びつきが検証されており、疎開が子供としてなされた経験であるゆえに意味づけ得ない出来事となり、1970年代に至ってようやく「不確かな」ものとして言語化されたという指摘は、戦時の体験について新しい側面を浮かび上がらせるものとなっている。〈死者〉と〈過去〉のものとして認識されがちな戦時の体験を、〈生者〉の〈現在〉のものとして捉え直したといえ、考察の新しさと深さが評価された。

問題点としては、「文化史」としてまとめられながらもパラダイムの転換の記述にはなっていないという点や、「内向の世代」というカテゴリーの曖昧さそのものを相対化し得ていないという点などが指摘された。しかしながらそれらの問題点は、今後の課題となるものであり、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。